

第三章 匂宮の物語 匂宮、侍従を迎えて語り合う

[第一段 四月、薫と匂宮、和歌を贈答]

*月たちて(月が変わって)、「*今日ぞ渡らまし(今日が引越の日だった)」と思し出でたまふ日の夕暮(と姫を思い出しなざる日の夕暮れは)、いともあはれなり(大将殿には非常に感慨深かったのです)。御前近き*橘の香のなつかしきに(庭先の橘の香りに馴付いて)、ほととぎすの二声ばかり鳴きて渡る(ホトトギスが二回鳴いて飛んで行きます)。*「月たちて」は注に<四月となる。>とある。*「今日ぞ渡らまし」は注に<薫の思い。四月十日が引越しの日であった。>とある。「大将殿は卯月の十日となむ定めたまへりける」と浮舟巻五章四段にあった。*「たちばなのかのなつかしき」は注に<『集成』は「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(古今集夏、一三九、読人しらず)を指摘。>とある。

「*宿に通はば(亡き人の家にも寄るならホトトギス私も泣き暮れていると伝えてくれ)」と独りごちたまふも飽かねば(と古今集歌を独り言なさっても薫殿は気が晴れず)、*北の宮に(北隣の二条院に)、ここに渡りたまふ日なりければ(匂宮がいらっしゃる日だったので)、橘を折らせて聞こえたまふ(橘の枝を従者に折らせて、その枝に畳紙を結び付けて次の歌を贈りなさいます)。*「やどにかよはば」は注に<薫の口ずさみ。『源氏積』は「亡き人の宿に通はばほととぎすかけて音にのみ泣くと告げなむ」(古今集哀傷、八五五、読人しらず)を指摘。>とある。「亡き人の宿」は、姫が引越す筈だった無人の新居に思いを馳せているのだろうか。新居は三条宮邸に近いとはあったが、何処とは示されていない。が、薫殿自身は何処と知っているのだから、空虚さが具体像となって身に沁みたのかも知れない。また、ホトトギスは夜に渡る鳥なので、闇の国・黄泉の国・死出の世界からの遣いという見方もあるようで、その意味では「亡き人の宿」は<故人の魂が居る死出の世界>のことでもあるらしい。*「北の宮」は注に<二条院をいう。薫邸は三条宮。>とある。三条宮邸から見て二条院は北隣だったらしい。

「忍び音や君も泣くらむ、かひもなき死出の田長に心通はば」(和歌 52-01)

「この日だと 知って来鳴くか ホトトギス」(意訳 52-01)

*注に<薫から匂宮への贈歌。『河海抄』は「いくばくの田を作ればかほととぎすしでの田長朝な朝な呼ぶ」(古今集雑体、一〇一三、藤原敏行)。『花鳥余情』は「死出の山越えて来つらむほととぎす恋しき人のうへ語らなむ」(拾遺集哀傷、一三〇七、伊勢)を指摘。>とある。「死出の田長(しでのたをさ)」は、ホトトギスが田植えの頃に遣って来る渡り鳥で、その田植えの現場監督が「賤の田長(しづのたをさ、農夫長)」と呼ばれたことから、死界の鳥ともされるホトトギスをこう洒落て呼んだものらしい。要するに、ホトトギスの異名とのことで、橘の枝にこの句を付けて贈れば<この橘に来鳴くホトトギスに故人が偲ばれて泣ける>という歌筋になる。で、この私の悲しみに「心通はば(君も共感するなら)」「君も泣くらむ(君も泣けるだろう)」という問い掛けは、この四月十日が常陸姫の引越日だと君も知っていたはずだろうから、という探りになっている。で、勿論、匂宮はこの日が大将が予定した姫の引越日であることは知っていた。だから、宮はそれ以前の三月二十八日に姫を連れ出そうと画策していた。だから、姫はその直前に入水した。が、薫殿は姫の入水や遺体の未発見は知らず、病死と思っている、かと思う。だから薫大将は、宮と姫の仲には複雑な思いはあっても、姫の死に付いては割

と素朴に悼んでいて、特に宮を責める意図は無いのだろうが、匂宮にしてみれば、内実に善悪は無いにしても、自分が姫を追い詰めたという外形的な責任は感じざるを得ないので、重圧はありそうだ。外形上の事で言えば、姫は大将の体面を考えて入水したのではなく、むしろ大将との縁を喜ぶ母や乳母の期待に添えないことに苦しんだようでさえあるが、結果として体面が施されたのは正に薫大将だ。薫殿には、いくらかの不熱心さの他には、特に落ち度も無いので、体面は保たれて当然かも知れないが、こういう都合の良し悪しが、本来は宮を拒みきれないから姫は身を引くべく入水した筈が、宮に走らずに大将を立てた、という誤った印象を各方面に与えかねないことは、いくらか危惧される。

宮は、女君の御さまのいとよく似たるを(宮は女君が常陸姫にとても良く似ているのを)、あはれと思して(印象深くお思いになって)、二所眺めたまふ折なりけり(お二人で庭を眺めていらっしやる時でした)。「*けしきある文かな(わざとらしい言い方だな)」と見たまひて(と匂宮は薫殿の歌をお思いになって)、 *「けしきあり」は大辞泉に<一風変わっていて趣がある。>または<普通でない。あやしげである。>とある。「けしき」は<様子>だから、何にでも「けしき」はあるわけで、それを敢えて「けしきあり」というのは、普段とは<何か変わった様子だ>という意味にはなりそうだが、薫殿の歌を<変わっている>とは匂宮は思わないだろう。また、下の匂宮の返歌は、薫殿が「心通はば」「君も泣くらむ」と問い掛けて来た歌に、心当たりは無いと答えているようだが、実は心当たりはあるわけで、是はオトボケだ。で、薫殿は匂宮がトボケルのは承知の上で、軽く揺さぶって来たわけで、こういう見え透いたせめぎ合いはよく<わざとらしい>と言う。また、是が内心文ではなく、女君の手前で言い紛らわした発言文なら<変な歌だな><くらいの言い方になりそうだが、「見る」は<思う、判断する>だ。

「橘の薫るあたりは、ほととぎす、心してこそ鳴くべかりけれ (和歌 52-02)

「橘は 間違えやすい ホトトギス (意識 52-02)

*注に<匂宮の返歌。『全書』は「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」(古今集夏、一三九、読人しらず)を指摘。>とある。橘で昔の人を懐かしむのは良いとして、ホトトギスは死出の遣いだから、間違えて枝に止まると故人を偲ぶ事になって不吉だ。という歌筋で、薫殿の「死出の田長に心通はば」「君も泣くらむ」というお尋ねには、私には故人に心当たりはないので宛先違いでしょう、と応えたものなのだろう。正面切ってあなたの間違いだと言えば嘘になるが、ホトトギスの間違いだといえば取り敢えずは言い逃れになる、だろうか。

わづらはし(迷惑な御門違いです)」

と書きたまふ(と返歌なさいます)。

女君、このことのけしきは、皆見知りたまひてけり(二条院の女君はこの常陸姫の事情は全部ご存知だったのです)。「あはれにあさましきはかなさの(悲しい急な若死にの姉君も義妹も)、さまざまにつけて心深きなかに(それぞれに悩みが深い姉妹の中で)、我一人もの思ひ知らねば(私一人が悩みも無く)、今までながらふるにや(今まで生き永らえて来たのか)。それもいつまで(それもいつまでのことか)」と心細く思す(と心細くお思いになります)。宮

も、隠れなきものから(宮も女君の縁者である常陸姫のことは女君に隠せないことだったので)、隔てたまふもいと心苦しければ(話題になさらないのもとても気詰まりだったので)、ありさまなど(姫と二人で遊んだ日のことなどを)、すこしはとり直しつつ語りきこえたまふ(少しは当たり障りの無いように言い換えてお話しなさいます)。

「隠したまひしがつらかりし(あなたが姫の素性を、隠していらっしゃるのが辛かった)」

など、泣きみ笑ひみ聞こえたまふにも(と宮は泣いたり笑ったりしながらお話しなさるに付けても)、異人よりは睦ましくあはれなり(女君は姫の血縁者なので、他の人よりは親身な話し相手に思えてしみじみします)。ことごとしくうるはしくて(何事も格式張って壮麗で)、例ならぬ御ことのさまも(ちょっとした御不調でも)、おどろき惑ひたまふ所にては(大騒ぎなさる六条院では)、御訪らひの人しげく(御見舞客が多く)、父大臣(ちちおとど、養父の源氏右大臣や)、兄の君たち(せうとのきみたち、その子息の義兄たちが)隙なきも(ひまなきも、ずっと付き添っているのも)、いとうるさきに(とても煩わしいが)、ここはいと心やすくて(この二条院はとても気楽で)、なつかしくぞ思されける(ゆっくり出来る気がなさいます)。

[第二段 句宮、右近を迎えに時方派遣]

いと夢のやうにのみ(宮は姫の死が全く夢のようにばかり)、なほ(今だに)、「いかで、いとはかなりけることにかは(如何してこんな急なことだったのか)」とのみいぶせければ(と不審でならなかったのも)、*例の人びと召して(いつもの時方などを呼び出ささって)、右近を迎へに遣はす(右近に話を聞こうと宇治に迎えに遣わします)。*「例の人びと」は衛門大夫時方や内記で式部少輔の道定などの宇治に通い慣れた者だろうが、川宿遊び以降は特に時方が重宝されている。

母君も(母君も夢を見ているようだったが)、さらにこの水の音けはひを聞くに(これ以上宇治川の急流の音を聞いていると)、我もまろび入りぬべく(自分も川へ転がり込んでしまいうるさうに)、悲しく心憂きことのどまるべくもあらねば(悲しく気落ちして心休まることも無いので)、いとわびしうて帰りたまひにけり(ひどく落胆して京にお帰りになりました)。

念仏の僧どもを頼もしき者にて(念仏の僧たちを喪中の番人にして)、いとかすかなるに入り来たれば(人少なな山荘に時方たちは遣って来たので)、ことごとしく、にはかに立ちめぐりし宿直人どもも(姫の存命中は嚴重に直ぐに出入りを遮った門番たちも)、見とがめず(この御使者を見咎めません)。「あやにくに(今はこうだが)、限りのたびしも入れたてまつらざるに(最後になった先日の宮のご訪問時にはこの山荘の中に宮をお入れ申すことは出来なかったものだ)」と、思ひ出づるもいとほし(と時方に思い出されるのも残念です)。

「さるまじきことを思ほし焦がるること(無茶な恋をなさるものだ)」と、見苦しく見たてまつれど(と時方は宮の宇治通いを苦々しく思い申ししていたが)、ここに来ては(こうして姫の亡き後に、此処に来て見れば)、おはしましし夜な夜なのありさま(宮が無理を押しお越

しになった夜の山道の困難さや)、抱かれたてまつりたまひて(姫が宮に抱かれ申しなさつて)、舟に乗りたまひしけはひの(舟にお乗りになった姿が)、あてにうつくしかりしことなどを思ひ出づるに(上品で美しかったことなどが思い出されて)、心強き人なくあはれなり(若武者に似ず感じ入ります)。右近会ひて、いみじう泣くもことわりなり(右近が時方に面会して、その時方の様子に共感して、大泣きするのも当然です)。

「かくのたまはせて(宮様から詳しい事情を聞くために、あなたにお出で頂きたく仰せがあり、)、御使になむ参りつる(お迎えに参上しました)」

と言へば(と時方が言う)、

「*今さらに(今は特に)、人もあやしと言ひ思はむも慎ましく(喪中の外出を他の女房たちも不審に思い言うのも遠慮されますし)、参りても(宮様の御前に参上申しましても)、*はかばかしく聞こし召し明らむばかり(まだ私の気持も落ち着きませんので、上手く宮様にご納得頂けるように)、もの聞こえさすべき心地もしはべらず(お話し申せる気も致しません)。この御忌果てて(この御忌中が終わって)、*あからさまにもなむ(ちょっと用足しに出かけます)、と人に言ひなさむも(と女房に言い繕うにも)、すこし似つかはしかりぬべきほどになしてこそ(何とか相応しくなった時分に)、心より外の命はべらば(不調法にも生き永らえておりますれば)、いささか思ひ静まらむ折になむ(いくらかは気分が落ち着きましてから)、仰せ言なくとも参りて(宮様の仰せがなくても参上して)、げにいと夢のやうなりしことどもも(本当に夢のようだった事柄を)、語りきこえまほしき(お話し申したく存じます)」 *「今さらに」は<今になって殊更に>ではなく、「今」「さらに」で<喪中の今は特に(外出できない)>という言い方のだろう。下に「この御忌果てて」とも明示されている。 *「はかばかしく～」は<まだ喪中なので気分も落ち着かない>というような言い方になるのだろうが、何と云っても遺体が上がっていないので、にも関わらず葬送は済ませたのであり、今はまだ外形的にも事態が収まっていないので、説明の仕様が無い、というのが実情なのだろう。 *「あからさま」は<短時間(の外出)>を言うらしい。私見では<辛うじて>に似た語感で<少し無理してでも>くらいの意味合いがあるような気はするが、それでも<無理>とは明示せずに<せめて短時間でも>という言い方ではありそうだ。

と言ひて(と右近は言つて)、今日は動くべくもあらず(今日は動きそうにありません)。

[第三段 時方、侍従と語る]

*大夫も泣きて(時方も泣いて)、 *「たいふ」はやつと時方の明示だ。「例の人びと召して」(二段)でも、ほぼ明示されたようなものだが、やはり現代人の読者は特定されないと落ち着かない。

「さらに(私は全く)、この御仲のこと(宮様と姫君の御仲の事情は)、こまかに知りきこえさせはべらず(詳しく存じ申さず)、物の心知りはべらずながら(物の道理も分からないながら)、たぐひなき御心ざしを見たてまつりはべりしかば(非常に強い宮様の姫君への御愛情ぶりを拝し申しましたので)、君たちをも(あなた方とも)、何かは急ぎてしも聞こえ承らむ(何

も慌てて知り合い申さなくても)、つひには仕うまつるべきあたりにこそ(どうせ同じ主君に仕えることになる人たちだ)、と思ひたまへしを(と悠長に考えていましたが)、言ふかひなく悲しき御ことの後(残念な姫君の御逝去後は)、私の御心ざしも(私のあなたがたへの親近感も)、なかなか深さまさりてなむ(却って深くなりました)」

と語らふ(と話します)。

「わざと御車など思しめぐらして(宮様がわざわざ御車をお手配なさって)、奉れたまへるを(差し向けなされたものを)、空しくては、いといとほしうなむ(空のままでは帰るに帰れません)。今一所にても参りたまへ(お一人だけでもお乗り下さい)」

と言へば(と時方が言うと)、侍従の君呼び出でて(右近は侍従の君を呼び出して)、

「さは、参りたまへ(あなたが行きなさい)」

と言へば(と言え)、

「まして何事をは聞こえさせむ(あなた以上に、私が何をお話し申せましょう)。さても、なほ(それにしても、やはり)、この御忌のほどにはいかでか(この御喪中謹慎をしている者が伺うのは憚られます)。忌ませたまはぬか(宮様は穢れをお避けなさいませんか)」

と言へば(と侍従が言うと)、

「悩ませたまふ御響きに(宮様は御自身の御不調の御見舞騒ぎで)、さまさまの御慎みどもはべめれど(いろいろと行動を差し控えなさるべきところですが)、忌みあへさせたまふまじき御けしきになむ(忌明けを待ち切れない御様子なのです)。また、かく深き御契りにては(また、このように深い御二人の御縁からして)、籠もせたまひてもこそおはしまさめ(宮様ご自身も服喪なさるべき御身でもいらっしゃいますので、余所の穢れではごさいますまい)。残りの日いくばくならず(今はもう忌も浅い)。なほ一所参りたまへ(是非お一人は来て下さい)」

と責むれば(と時方が強いるので)、侍従ぞ、ありし御さまもいと恋しう思ひきこゆるに(侍従は、船宿遊びをした時の兵部卿の優美な御姿もとても恋しく思い申すので)、「いかならむ世にかは見たてまつらむ(あのような方に、また何時お目に掛かれようか)、かかる折に(今を置いて他に無し)」と思ひなして参りける(と思ひなして参上申しました)。

[第四段 侍従、京の匂宮邸へ]

黒き衣ども着て(黒い喪服を来て)、引きつくろひたる容貌もいときよげなり(外出用に化粧をし直した侍従はとても美しい)。*裳は(礼装の裳は)、ただ今我より上なる人なきにうちたゆみて(姫亡き今は仕える主人もいないと油断して)、色も変へざりければ(喪服用に染め

変えていなかったのので、薄色なるを*持たせて参る(薄紫色の裳を供の童女に持たせて参上します)。*「裳」は注に<『完訳』は「裳は、唐衣とともに、主人の前に出る際の礼装。今はお仕えする主人も亡くなったので、油断して鈍色のを染めておかなかった」と注す。>とある。*「持たせて」の使役は注に<『集成』は「薄紫色の裳を持たせて参上する。お供の女の童などに持たせるのであろう」と注す。>とある。

「おはせましかば(姫君が生きていらっしゃったら)、この道にぞ忍びて出でたまはまし(この京への道を人目忍んで進みなさったことだろう)。人知れず心寄せきこえしものを(私も人知れず宮様の方にお力添え申していたものを)」など思ふにもあはれなり(と思えば悔しい)。道すがら泣く泣くなむ来ける(侍従は道々泣いて遣って来ました)。

宮は、この人参れり、と聞こし召すもあはれなり(兵部卿宮は宇治から侍従が参上した、とお聞きになると落ち着きません)。女君には、あまりうたてあれば、聞こえたまはず(女君には、今さら隠し立てする気もないが、そういう様子をお見せ申すのは、あまりに気持が見透かされそうで嫌気して、侍従は対の御方の既知でもあったが、お知らせ申しなさいません)。*寝殿におはしまして(宮は西の対から寝殿に向かいなさって)、渡殿に降ろしたまへり(侍従を東の渡り廊下に降ろしなさいました)。ありけむさまなど詳しく問はせたまふに(宮が姫の生前の様子を詳しくお尋ねになると侍従は)、日ごろ思し嘆きしさま(姫君が日頃思い悩んでいらしたことや)、その夜泣きたまひしさま(その失踪の夜に泣いていらっしゃった事を)、*「寝殿におはしまして渡殿に降ろしたまへり」は注に<『集成』は「ご自身は寝殿においでになって。中の君のいる西の対にいたのを、侍従到着と聞いて、自室(寝殿)に赴いたのである。侍従を渡殿に降ろさせなされた。寝殿の東の渡殿に車を着けさせたのであろう。西の対から遠く、人目にも付かぬよう計らう体」と注す。>とある。従う。

「あやしきまで言少な(今にして思えば、あまりに言葉数が少なく)、おぼおぼとのみものしたまひて(ぼんやりとばかりしていらっしゃって)、いみじと思すことをも(思い詰めていらっしゃったことも)、人にうち出でたまふことは難く(私や右近殿に打ち明けなされることはなく)、ものづつみをのみしたまひしけにや(胸に秘めていらっしゃったのか)、のたまひ置くこともはべらず(言い残しなされたこともございせん)。夢にも(私たちは夢にも)、かく心強きさまに思しかくらむとは(姫君がこれほど強く思い掛けていらっしゃったとは)、思ひたまへずなむはべりし(思い至りませんでした)」

など、詳しく聞こゆれば、ましていとみじう(などと詳しく申し上げると、宮はますます悲しくなると)、さるべきにても(姫が短命の宿命だったとしても)、ともかくもあらましよりも(病死や事故死よりも)、いかばかりものを思ひ立ちて(どんなに辛い思いで)、さる水に溺れけむ(宇治川へ身を投げたことか)と思しやるに(と思ひ遣りなされると)、これを見つけて堰きとめたらましかば(早く気づいて止めていれば)と、湧きかへる心地したまへど(張り裂けそうな気がなされたが)、かひなし(どうにもなりません)。

「御文を焼き失ひたまひしなどに(姫君が御手紙を焼き捨てなされたことなどに)、などで目を立てはべらざりけむ(どうして其処まで気が回らなかったかと、悔やまれます)」

など、夜一夜語らひたまふに(などと、宮が一晩中思い出を語りなされるのにつれて)、聞こえ明かす(侍従はお応え申します)。*かの巻数に書きつけたまへりし(姫君が巻数に書きつけなされた)、母君の返り事などを聞こゆ(母君への返歌を侍従は宮にお知らせ申します)。*「かのかんずにかきつけたまへりし」姫の母君への返歌は「鐘の音の絶ゆる響きに音を添へてわが世尽きぬと君に伝へよ」(和歌 51-22)、だった。是を侍従が宮に伝えれば、「君に伝へよ」の「君」は<兵部卿宮>になる。

[第五段 侍従、宇治へ帰る]

何ばかりのものとも御覽ぜざりし人も(特に如何とも思っていられなかった侍従も)、睦ましくあはれに思さるれば(こうして一晩中話してみると、宮は親しく情も湧くように思われ為さるので)、

「わがもとにあれかし(此処で仕えなさい)。あなたももて離るべくやは(対の御方も姫の縁者なのだから)」

とのたまへば(と仰ると)、

「さて、さぶらはむにつけても(そのようにお仕え申すにしても)、もののみ悲しからむを思ひたまへれば(今は姫の御無念が悲しく存じられますので)、今この御果てなど過ぐして(また後日、忌明けなどの後にでも、改めて伺います)」

と聞こゆ(と侍従は申します)。「またも参れ(では、また改めて参れ)」など、この人をさへ、飽かず思す(と宮は、この人までが名残惜しく思われなさいます)。

暁帰るに(早朝に侍従が宇治山荘に帰る時に)、かの御料にとて(常陸姫が隠れ家で使うようにと)まうけさせたまひける(用意させていらしかった)櫛の篋一具(くしのはこひとよろひ、化粧箱一式と)、衣篋一具(ころもばこひとよろひ、衣装箱一式を)、贈物にせさせたまふ(兵部卿宮は贈物に持たせなさいます)。さまざまにせさせたまふことは多かりけれど(姫のためにはいろいろと準備した物は多かったが)、おどろおどろしかりぬべければ(全部では引越道具のように大袈裟になってしまうので)、ただこの人に*仰せたるほどなりけり(侍従が今持てるだけの物なのでした)。*「おほす」は「仰す」ではなく「負ほす(負わせる)」ではないのか。京都大学本の写本画像[v50, p. 063]でも保坂本[34/87]でも仮名表記で、校訂では如何して「仰せたる」と当てているのか意味不明だ。

「なに心もなく参りて(何の用意も無く参上して)、かかることどものあるを(こうして頂き物だけが有るのを)、人はいかが見む(女房たちは如何思うだろう)。すずろにむつかしきわざかな(言い訳が面倒だ)」

と思ひわぶれど(と侍従は困ったが)、いかがは聞こえ返さむ(辞退など出来るはずありません)。

右近と二人、忍びて見つつ(侍従は右近と二人でその品々を隠れて見ては)、つれづれなるままに(暇潰しに)、こまかに今めかしうし集めたることどもを見ても(ゆっくりと今風の趣向を凝らした物ばかりなのを見ると)、いみじう泣く(残念がって非常に泣きます)。装束もいとうるはしうし集めたるものどもなれば(衣装類もとても美しいものばかりなので)、

「かかる御服に(この御忌中に)、これをばいかでか隠さむ(こんな派手な衣装を何処に隠したものか)」

など、もてわづらひける(などと持て余していました)。